

新型コロナ対策 医療〈と〉経済



大阪府医師会理事

栗山 隆信

「cool heads but warm hearts」。イギリスの経済学者マーシャルが1885年にケンブリッジ大学の教授就任講演で残した有名な言葉です。本会の医療問題研究委員会の講演において、日本福祉大学の二木立先生は若手会員に対して、接続詞が「andではなくbut」であることを強調されました。慶應義塾の権丈善一教授は、経済学の訓練をすれば両者は平行して育たないため、意図してbutを使ったと解釈し、「冷静な頭脳を持ち、しかし暖かい心をも兼ね備えた」と訳しています。職業や立場による違いはあるとしても、あえて言えば、医療者は「cool heads and warm hearts」、福祉関係者は「warm hearts but cool heads」でしょうか。

本会調査委員会では、（調査と言っても不平等を調べるのではなく！）会員や府民を対象にインターネットアンケートを適宜実施しており、新型コロナウイルスが流行し始めた本年4月初旬には、1,200名の府民に協力願いました。新型コロナウイルス感染症の流行への対策に関する設問に対して、その結果は下記のグラフの通りです。20代は「経済 but 医療」、30～40代

は「医療 and 経済」、50代以上は「医療 but 経済」と捉えられ、年代による異同は興味深いところです。

精神科医のきたやまおさむ（北山修）・前田重治両先生の共著*では、「両立しがたいものを両立させ、揺れるところに価値、すなわち振動を収納するという意義」と記されています。更に同著では、「『あれか、これか』の2分法ではなく、『あれも、これも』という積極的な意味での『いい加減』に生きる。『AかBか』ではなく、『AもBも』あるいは『AとかBとか』として考えるなら充実感があり、複数の視点から見た方が俯瞰で世界がよく見える。『ああでもあり、これでもある』という両面的で包括的な理解は自分でやるしかない」（一部略）などと述べています。

今後も続くwithコロナ対策では、医療者は医療に、政治家は経済に主眼を置くべき立場でしょうが、日常生活においては、「医療とか、経済とか、教育とか」柔軟に「良い加減に」対応して生き延びていくのが「良い生き方」なのではないでしょうか。

*「良い加減に生きる 歌いながら考える深層心理」（講談社）2019年5月

新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、わが国でも感染者や患者が増加していますが、この感染症の流行への対策として、あなたが最も優先すべきと思うことはどれですか。

